

兵庫県におけるラミーカミキリの分布
(兵庫県甲虫相資料・68)

高橋 寿郎

美しいカミキリである。小形であるが(体長8~17%)真つ黒に美しい白青色の軟毛でおゝわれた斑紋を有する。この白青色は生きていたは大変鮮か死後白黄色に変化する、従つて標本を見た感じと生きて活動しているときと可成り違ふ、やはり生きて飛んでいる時とか葉上に止まっているときより一層美しい。

いかにも南方系の種だなあという色彩を呈している。北支那産をタイプ標本として1853年Saundersによつて新種記載され

(Trans. Ent. Soc. London, 2(1): 112, Pl. iv. f1), 種名は中國に駐在した英國領事フォーチモン(Fortune)に獻名されている。

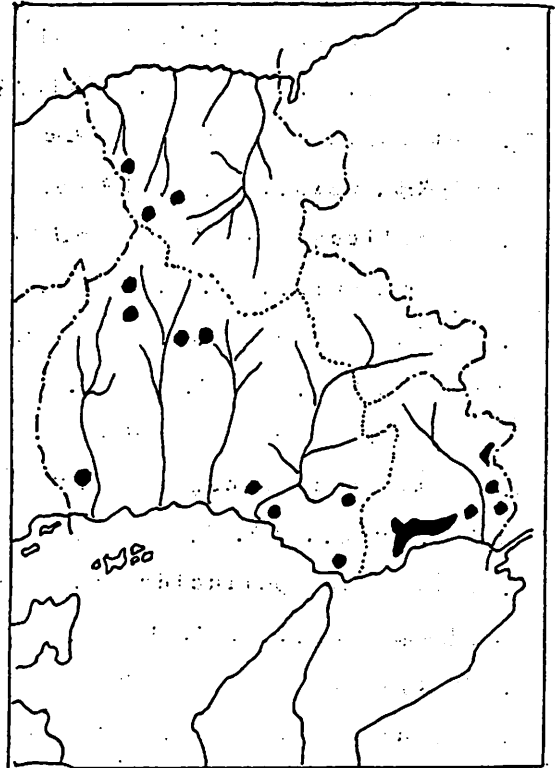
日本からの初記録は1929年高橋 葵氏が長崎県下からされたものであると(病虫害雑誌, 16(8):452)(広瀬幸一氏の“ラ

ミーの害虫に就いて、昆虫世界、40巻、

470号、P351~355、1936、なる報文の中で“本種は長崎県下に於て発生すると云われている”と記されたのは前記高橋氏の報文を引用されたのかも知れない。また1938年には福岡県から初めての記録として福岡市内大濠公園内人家の燈火に1938年8月10日午後8時頃飛来せしものを採集したとある(高瀬経倫、虫の世界、vol. 2, No. 9/10:199, 1938)。

戦前は調査が不充分かつたこと及び情報交換が余り活発でなかつたこと等により本州からの記録は無かつたように思われる。

戦前での図説は平山修次郎氏が2度にわたり原色で図説されている。即ち、原色千種統昆虫図譜



兵庫県におけるラミーカミキリの分布

(pl. 73, f8, p. 164, 1935). 原色甲虫図譜 (pl. 45, f. 8, p. 138, 1940) 共に同一図版であるが長崎県産の標本を図示してどうしたわけか分布を九州とのみ記録している。1940年発行の有名な水戸野武夫著“日本産絹翅目分類目録, Pars. 8, 天牛科”には分布として Japan (Honsyu, Kyushu), Formosa, China, Chusan Islands (Tamason Island) が掲げてありこゝでは分布に本州を入れておられる。氏が本州にラミーカミキリが侵入した模様と紹介されたのは1950年のことである(新昆虫, 3(7/8):10-11) 従つて前記目録の時の本州なる分布はどの様な記録に基かれたのか一寸不明。終戦直後に出版された関 公一著の新日本産天牛科目録(1946)には分布を日本(本州, 九州), 台湾, 支那, 舟山列島とされている。本書は多分に水戸野氏の文献の引用があるようなので、この本州の分布がはたしてどの様な記録の裏付けで発表されているのか一寸わからない。たゞこの時点では四国の分布は知られていなかったようである。終戦前後には本州の山口、広島県あたりには分布していたのではないだろうか? とに角1948年(昭和23年)東正雄氏が有馬温泉林溪寺内で本種が大発生したと紹介された(新昆虫, 1(9):42) ことにより本種が兵庫県下で始めて正式に産することが報ぜられると共に本州での産も之が初めての記録になるのではないかと思われる。翌1949年には戸澤信義氏が西宮市甲東園から記録された(宝塚昆虫館報, №60:20) がその中で25年来甲東園に住んでいて一度も本種を見たことがないと記されると共に林 匡夫博士からの私信として神戸市内、名古屋市内、岡山の足守、松江郊外と同時に記録が出始めていることを記しておられる(記録の項にもあるように筆者の兵庫県下で始めて本種を採集したのは戸澤氏の記録された年山の街で採集している。1ex., 10-v11-1949, また御影での採集品は進行中の阪急電車の中で丁度御影駅をすぎた所で車内に飛び込んできたのを採集したものである。1ex., 18-v1-1955)。

四国からの記録は何時頃からあつたのか。1953年石原 保博士その他の方々の“石 鷄山と面河溪の昆虫相”(四国昆虫学会々報, vol. 3, Suppl.) の中で本種が四国で近年増加の傾向にあると記しておられる(p. 98)(楠 博幸・菅 晃著、1978年刊“愛媛県のカミキリムシ”の中の本種の記録も1953年採集のものが一番古く記録されている)。

この様にして本種は現在では本州、四国、九州に分布する種になつているし所によつては大発生しており普通種になつている。少くとも兵庫県下では普通種である。

本州の東限は現在千葉県市原郡里見といわれている(げんせい, 16:13, 1966, 中村 肖夫)が兵庫県から東の地区では小田原市に多く産する記録がある(月刊むし, №39:19, 1978), それ以外で今の所それ程多く産するという地の報告は知らない。たゞ分布は東にひろがつているようである。

所で兵庫県下での本種の分布状況を一応眺めてみだい。前にも記した如く兵庫県下で本種を始め
て記録されたのは東 正雄氏による有馬である。それから割合記録が報告されている、此処に兵庫
県の産を東から順に記して見よう〔 〕は記録、()は筆者採集

川西市一庫〔 17-V1-1966、仲田、1970、16-V1-1968、仲田、1978 〕、
笹部〔 2-V11-1972、9-V11-1972、28-V-1973、9-V1-1973、28-V11-1973、
9-V1-1974、29-V-1975、6-V1-1975、20-V1-1976、8-V1-1977、仲田、1978 〕。

伊丹市内(1ex., 1-V11-1956)。

宝塚市紅葉谷〔大倉、遊磨、1974〕。

西宮市〔V1-1950、林、1955〕、甲東園〔1♀、11-V11-1949、1♂、13-V11
-1949、1♀、14-V11-1949、戸沢、1949〕。

神戸市本山町〔2exs., 29-V1-1950、石井、1952〕、東灘〔1ex., 18-V1-1955、
吉阪、中谷、1956〕、御影町(1ex., 18-V1-1955)、布引〔3exs., 26-V1-1955、
吉阪、中谷、1956〕、烏原〔4exs., 8-V11-1965、2exs., 17-V11-1966、
8exs., 31-V11-1966、1ex., 7-V11-1968、2exs., 27-V1-1971、1ex.,
14-V11-1973、1ex., 24-V11-1974、1ex., 3-V11-1974、1ex., 27-V11-
1975、3exs., 29-V-1976、36exs., 6-V1-1976、45exs., 12-V1-1976、
55exs., 13-V1-1976、61exs., 27-V1-1976、23exs., 4-V11-1976、20exs.,
11-V11-1976、12exs., 18-V11-1976、1ex., 22-V-1977〕、山の街(1ex.,
10-V11-1949)、教育植物園(1ex., 9-V11-1961)、木幡(1ex., 28-V-1961)、
藍那(2exs., 14-V1-1978、4exs., 19-V1-1978、8exs., 14-V11-1978)、
有馬温泉林溪寺〔2exs., 9-V11-1947、65♂、15♀、20-V1~28-V11-1948、東、
1948〕明石市〔♂、v1-1954、山口、1955〕。

三木市志染町大谷〔3exs., 7-V11-1976、三木、1978〕

加古川市内〔中谷、吉阪、1956〕

神崎郡香寺町須加院〔3exs., 15-V1-1974、森田、1975〕、大河内町川上(2exs.,
2-V11-1977、1ex., 15-V11-1977、1ex., 6-V11-1977)

朝来郡生野栃原〔1ex., 26-V11-1972、藤田、1973〕

柏生市三渡山(1ex., 20-V11-1974)

宍粟郡禰知溪谷(1ex., 20-V1-1976)、赤西溪谷〔1ex., 25-V11-1968〕

262s., 15-V111-1971, 黒田, 1972., 1ex, 30-V11-1972, 1ex, 6-V111-1972, 畑中, 1972), 音水溪谷 (2exs., 16-V11-1972, 1ex, 30-V11-1972, 1ex, 3-V1-1973)。

養父郡笹定〔16, 22-V11-1972, 遊磨, 1972〕, 氷の山〔29-V11-1973, 高橋, 1975〕。

美方郡鉢伏山麓〔1ex, 16-V11-1971, 辻, 1971, 1972〕。

兵庫県下では御覧のごとく可成り広く分布しており海岸線沿いにはほぼ分布していると考へられる。中央部から氷の山, 鉢伏山迄いことになるが案外日本海側に記録が無く、多紀、氷上、出石、城崎の各郡にも記録が無いのが気にかかる、それと南方系でありながら淡路島から記録がないのも不思議である。

神戸電鉄の木籠駅前のムクゲに多く発生しているのを目撃したことがあるが烏原貯水池の奥は1965年頃から毎年採集出来ており1976年には今迄どうも出現期を間違えて考へていたようで御覧のごとく6~7月上旬に物凄く発生しているのに遭遇した。現在藍那付近にも多くいる所謂神戸電鉄沿線は広く多く産する地域である。神崎郡大河内町川上でも可成り発生しているのを目撃した。

本種の食樹としては小島圭三・岡部正明氏がまとめておられるのによるとトウグワ、ヤブマオ、ラミー、ムクゲがあげられている(日本産カミキリムシ食樹総覧, 1960)。

幼虫の記載は次の文献に詳しい"小島俊文, Jour. Coll. Agric. Tokyo Imp Univ, 11(3):1931, 小島圭三、げんせい、№9:58, pl. 19, 27-29, pl. 20, 1-3, 1959., №10:21-46, 1960,, (成虫の産卵と幼虫の食性)。

上翅の基部の黒色部の中央側方に白青色の小紋があるのが原型であり、10余型が知られているとのことであるが日本産のものは変化が少ない。

参考までに烏原で1976年に採集した255個体(データーにあるように5月29日より7月18日迄に採集したもの)を型にわけて見ると基本型(原型・上翅基部の黒色部の中央側方に白青色の小紋があるもの), 204個体。

m. innotata Pic. (白青色紋を欠くもの), 24個体。

m. bisbimotata Pic (白青色紋が2個ならぶ), 15個体

m. fasciata Pic (白青色紋が会合線近くまで拡大する), 1.2個体。

ということになり割合斑紋の変化というものは少いようである。体の大小もそうばらつきがある

ように思われないが8%から1.7%位のものまでいる(渡部泰明、中村慎吾両氏が広島県産の標本に基いて前胸背の斑紋、翅鞘の斑紋の変化をまとめておられるが翅鞘の変化は大体鳥原産の傾向に似ている“広島虫の会々報、№15:165-167, 1976”)。

(付記)本報文は1977年に姫路昆虫同好会誌“てんとりむし”に原稿として送ったが同会が休会状態なので若干補足してまとめたものである。

三 木 市 内 の ギ フ 蝶

小 倉 滋

今年も、3月14日頃より、室内飼育のギフチョウが次々と羽化して、次々と飛んでゆく。屋外のものも、3月28日にさなぎから脱出した殻がみられたので、自然のものも羽化しているであろう。

かつて、三木市広野地区では、“春の女神”といわれる美しいギフチョウが多く見られ、午前中はゆつたりと低く、午後は、高くすばやく飛ぶ姿が見られたという。

しかし、開発によつて、このギフチョウも激減した。

日本の特産種といわれるこのギフチョウは、氷河時代の生き残りの特徴を多く備えた貴重な蝶で、第三紀ごろ、分布が定まったといわれている。カンアオイ属を食べて、アジア洲に広く分布していたと考えられているが、その食草の分布から考えて、第四紀の氷河時代に海流の影響をうけ、比較的温暖であつたと考えられる日本を残して絶滅してしまつたらしい。三木地方では、中新世紀層の神戸層群(三津田累層淡河累層)と、その上部を覆う新世紀の大阪層群からなり、山地は、酸性土壌のやせ地で、赤松を主体に、二次林は暖帯広葉樹林におおわれている。樹相も貧弱であるが、ここに74種の蝶が確認されている。

小生は、ギフチョウの調査を、成虫の採集場所で確認するやり方を信用できず、食草確認は困難であるが、たんねんに産卵を確認することで生存を推定することにしている。食草となる産卵植物は、ヒメカンアオイであるが、これは、東播磨の加古川東岸流域に多いものである。食草の群落は、地歴に合致しており、第1次河岸段丘下位部の、日光が適当にあたり、水分は保水力は良いが、排水のよい部位に生育し、地歴的には、ヤマホトトギスやウラシマソウ、ミスミソウなどの植物と混生している場合が多いし、周辺の植物として、エビネランなどがみられる。

ギフチョウの産卵場所での生育状況を観察した結果は次のような状況である。